渡辺よしたかの戦後詠（1952 ～ 1955）をめぐって
― 歌人〝渡辺よしたか〟の生涯と作品（下）その２―

野口 周一[a]

[a]湘北短期大学

【キーワード】
台湾　　渡辺よしたか　　『あぢさゐ』

はじめに

前稿より渡辺よしたかの戦後詠を取り上げ始めた。その際の資料は、復刊された『あぢさゐ』が中心となる。それを3回ほどに分けて論じていく予定である。その事由は、よしたかが『碧き湖』（あぢさゐ社、1964年）を刊行した際、「『八重雲』刊行後の約十五年間ほどの作品は、作歌意識の不徹底を感じ一切採らず、三十巻から三十七巻末までの『あぢさゐ』誌上発表作から選出した」（206頁）と記されていることによる。よしたか自身、30巻（1955年〈昭和30〉）の前後により一線を画しているのである。

本稿は1955年（昭和30）までを対象とし、『あぢさゐ』は第31巻前半期の刊行物までを使用することにする。また、ことに台湾との連続性に意をおきつつ考察を進めていくことは従来通りである。

さて、今までに発表した渡辺よしたか関係の論文は、次の6編である。

①「歌人〝渡辺よしたか〟の生涯と作品（上）」（『湘北紀要』第 30 号、2009 年）
②「歌人〝渡辺よしたか〟の生涯と作品（中）―その 1―」（『湘北紀要』第 31 号、2010 年）
③「渡辺よしたかの戦争詠をめぐって―歌人〝渡辺よしたか〟の生涯と作品（中）その 2―」（『湘北紀要』第 32 号、2011 年）
④「君がため秋白日の香炷かむ―花蓮港街に生きた渡辺よしたか・みどり夫妻―」（『人物研究』第 28 号、近代人物研究会、2011 年）
⑤「渡辺よしたかの戦後詠（1946 ～ 1951）をめぐって―歌人〝渡辺よしたか〟の生涯と作品（下）その 1―（『湘北紀要』第 33 号、2012 年）
⑥「歌人・浜口英子と台湾」（『湘北紀要』第 33 号、2012 年）

なお、上掲⑥は渡辺よしたかを正面から取り上げたものではない。104歳で長逝した英子（あらたま社主宰者の一人・浜口正雄夫人）の三回忌を期して成稿、はからずも『あらたま』と『あぢさゐ』を繋ぐ植村蘭花（義孝）を取り上げることになり、よしたかの蘭花評も収録することができた。

以下、論旨の関係上、上掲論文を引用する際は、①を本編（上）、②を本編（中）－1、③を本編（中）－2、④を付編、⑤を本編（下）－1、⑥を浜口英子論、と順次略称する。

＜連絡先＞
野口 周一　noguchi@shohoku.ac.jp

1. 歌会のあり方

『あぢさゐ』第27巻8月号に、松井保という会員が「賭博短歌―歌会への抗議―」という一文を寄稿している。その内容を、以下の如く3点に分けて紹介したい。

①「私は去る四月、群馬県歌人クラブ[1]短歌大会に列席した。歌会の雰囲気に始めて浸ると共に、愕然とせざるを得なかった。歌人の卑下軽蔑して余りあるところの醜態に接した。それは互選の際にグループを作って相談し、作品の優劣には触れず、知己友人の歌に、無条件で点を投ずるという寸法である。華々しく文化を論じ、芸術を言々する歌人が点数を採らんが為に人間を見て、点を入れたり、入れて貰ったりするのである。／愈々一位の歌が朗詠された。『諍ひの果に黙せる夜は長しこのさびしさに妻も耐えゐむ』私は再び驚嘆しそして悲観に変って行った。大なる信頼と宿望であった歌会はまさに失望と慨嘆の外はなかったのである。一位の歌は甘楽歌人クラブの歌会でも一位になり、何物か賞品を得た歌なのである」。

②「歌誌を主宰する吉田緑泉[2]はこの歌会で次の如く強調した。『新生日本の息吹が巷にも横溢する時に、今日の歌は三位まで何れも暗たんとして悲哀を訴えた歌であり、概して溌剌とした明朗性に欠けていた。もっと嬉々とした明るい歌を望みたい』と。私は嘲笑のうちに吉田氏の意見を聞き、甚だその当を得ざるにいきどほりを感じたのであった。人間の感情即ち喜怒哀楽のうち最も感受性の強いものは哀であり、素材として選択され易いのである。新生日本の黎明に相応しい明るい歌を作れと言っても歌人は忠実である。左巻きの政府が破綻政治ばかりを行っている人口過剰国に住んで、楽観を許せぬ明日を知りながら、敢えて独立したからと言って即座に明るい歌の生まるべき筈がない。戦時中軍を激励した詩を書き、終戦で武器を棄てた詩を書かされ、更に独立だと言う声に齷齪と共鳴した詩を書くような詩人になりたく無いものである」。

③「甘楽には甘楽歌人クラブ[3]という機関がある。種々の結社が感情や流派を乗り超えて創立したものであるが、現在は全くスランプにある。結社というのはそれぞれの新境地を開拓せんが為の主張がある。／今年の新春歌会に二百円の会費を徴収したこともある。歌を酒宴と混同して、レクリエーション扱いにすることは高尚な教養を吹聴する所謂、アプレゲールの傾向と見てよい」。

以上である。①についてのよしたかの考えは、筆者はたびたび述べてきた（例えば、本編（上）参照）。あぢさゐ歌会の発足10周年を記念して歌集『あけぼの』が発行された際（1936年）、台湾の『あらたま』第15号第9号の「新刊覚書」欄に「全然歌壇外に閉塞して十年、これまでに仕上げた努力は尊敬さるべき」と載った。この「歌壇外に閉塞」について、あらたま社の浜口正雄は「渡辺さんが『あぢさゐ』を外部に出さないといふ意図がよく分るやうな気がする。自分と手を繋ぐ者を、現今の歌壇の悪影響に染まらしたくないといふ、一途さからこういふ挙に出てゐるものと思はれる」と好意的に述べている（『あぢさゐ』第10巻6月号）。台湾における花蓮港と喧しい戦後日本の地域の地理的環境は全く異なるが、よしたかの歌壇についての見方は不変である[4]。

②について、筆者の見解は本編（中）－2に述べてある。参照されたい。

③について、「回顧三十年」（後出）において「あぢさゐでは昔から決して、誌代以外、飲食を共にするための出費をしなかった」とある（本編（上）参照）。因みに、この年の会費を記すと、「A　正会員は誌代をふくめ月50円」、「B　維持会員は誌代をふくめ別に50円（計100円）」、「C　維持会員は誌代の外に月100円（計150円）」となっている

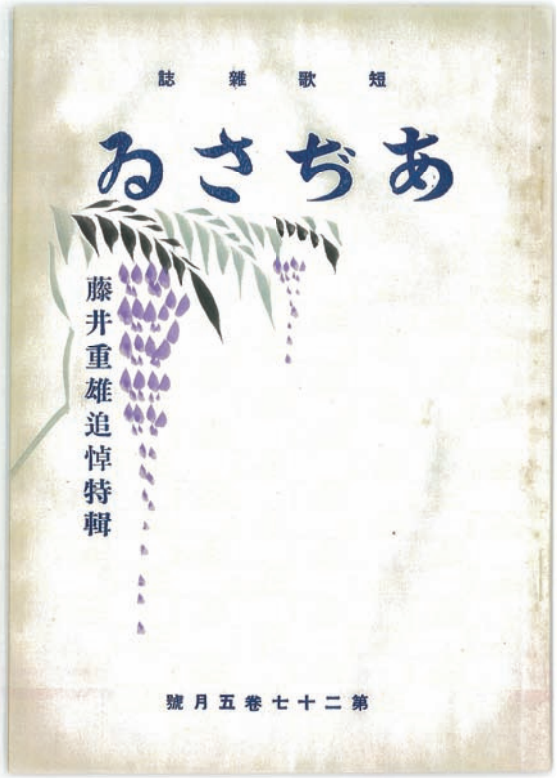
（「あぢさゐ清規」）。また、甘楽歌人クラブ会長の早水草之助は割烹旅館「美濃久（みのきゅう）」の主人であった。

なお、「甘楽（かんら）」郡は群馬県の西南部に位置し、現在は甘楽町、下仁田町（しもにた）、南牧村（なんもく）からなっているが、当時は6町17村であった。

2. 藤井重雄を喪う

藤井については、渡辺よしたか「1941年（昭和16）44歳」の項に「2月、門人藤井重雄を東京に送る」と標記し、「二五歳（昭和十六年）三月願いによって辞職した。この間許婚者のある女と恋愛問題を生じ苦悩した結果、再度勉学を志して上京し東洋大学専門部倫理国漢科一年に入学」と記した（本編（上）参照）。

これは『あぢさゐ』第27巻5月号「藤井重雄追悼特集」に拠るものであった【図版1】。1952年（昭和27）1月26日、藤井は闘病の甲斐も無く逝去したのであった。よしたかは、同誌に「挽歌　藤井重雄に捧ぐ」として19首を寄せる。



【図版1】

挽歌

藤井重雄に捧ぐ

渡邊よしたか

有明の月にかほりし白梅のただ幽明の虚しさを趁ふ
たちまちに一切空の空洞は拡ごりゆきて果しもあらず
近代の智性堕ちゆく運命の悲劇のひとつ君をうしなふ
忽忙のこころは還り速けき無常をここに厳粛に見よ
来るべきものは斯くまで冷酷の事実としてぞ見ねばならぬか
したごころ久しくたのみゐしからに茫然放心つづくいくにち
神戸よりかけつけここに額づきてうつしゑの前に所感述べ突く
先生と言ひざまを額をあげ得ざる母に寄りゆきせなさすりるのみ
いまいちど思あるうちにくべかりし女々よくちを、、、、、、、、
うつしゑに梅供へありあ梅のごと清かりしひと世かなしも
清涼の梅と薫雅とことなくもふさひしからにいよ、かなしも
時計の針見えなくなりぬいよ〳〵に迫る命を言ひにけらずや
たゞ母を思ひ諦めさせんとぞけなげなるかなや心既きし
みづからは泣くあきらめてたゞ母が残きのゆゑに慈ぶらもも
女ごゝろ思ひつめては心中を言ひ迫りた母が切なさ
春の雪ふみつゝ帰る靴のしみ冷たき泪またにじむなり
窓の畑みなしよとぞわが膝に泣きし東風の青春の日よ
遂に君に相見ざりけるあぢさゐの友の挽歌もみそなはしてよ
君の死をしはにいよ〳〵あぢさゐの崇き理想を遂げ行けよ

【図版1】

有明の月にかほりし白梅のただ幽明の虚しさを趁ふ

たちまちに一切空の空洞は拡ごりゆきて果しもあらず

近代の智性堕ちゆく運命の悲劇のひとつ君をうしなふ

忽忙のこころは還り速けき無常をここに厳粛に見よ

来るべきものは斯くまで冷酷の事実としてぞ見ねばならぬか

したごころ久しくたのみゐしからに茫然放心つづくいくにち

神戸よりかけつけここに額づきてうつしゑの

前に声あげて哭く
先生と言ひざま顔をあげ得ざる母に寄りゆきせなさするのみ
いまいちど息あるうちにくべかりし女々しきぐちをくりかへすなり
うつしゑに梅供へありああ梅のごと清かりしひと世かなしも
清淡の梅と重雄とこよなくもふさひしからにいよよかなしも
時計の針見えなくなりぬいよいよに迫る命を言ひにけらずや
ただ母を思ひ諦めさせせんとぞけなげなるかなや心碎きし
みづからは夙くあきらめてただ母が嘆きのゆゑに迷ひけらしも
女ごころ思ひつめては心中を言ひ迫りたる母が切なさ
春の雪ふみつつ帰る靴のしみ冷たき泪またにじむなり
恋の悩み切なしよとぞわが膝に泣きし重雄の青春の日よ
遂に君に相見ざりけるあぢさゐの友の挽歌もみそなはしてよ
君の死をいほにいよいよあぢさゐの崇き理想を遂げ行かんむぞよ

また、よしたかの手になる「藤井重雄の人と作品」、「藤井重雄略年譜」を紐解くと、この間の経緯が理解される。よしたかは彼が花蓮港庁に勤務したことにより相知ることになり、その女性問題について「その相手に許婚者があるにも関らず肉体的な交渉にまで進んだため、相当に彼は苦悩し、混乱をしたようであった。当時私の許へは日分夜分彼はその苦衷を訴へて来た」と率直に記す。東洋大学卒業後、「昭和十八年神奈川県立平塚農業高校教授を嘱託された」、「平塚市多額納税者岡本金吾長女みどりと結婚」、昭和二十一年に「妻みどりさんとは結婚して二年位しか同棲しなかったが、長女美智子さんを残して産後みどりさんは死亡」とある。その後、「昭和二十三年不治の肺患に犯され」「神奈川県秦野療養所に入所」していたのであった。

よしたかは、時雨山房として「湘南の梅」をものし、そこには「正月匆匆京都奈良をめぐり、熊本博多まで足を伸して二月はじめ、京阪支部の歌会に出るため平井三恭のところに着いたところ、次子から平井君あてに重雄の死を報じて来てゐた」、「私は沈痛の思ひに堪えて阪神歌会にのぞみ、翌夕平塚の重雄の写真の前にぬかづいた」、「湘南の春は早い。霊前に梅がさしてある。重雄に供げる花は当然梅でなければならない。そして梅があげられてゐる。それはかなしくもすがすがしい重雄にふさわしい花だ。重雄の死に、重雄の短い一生にふさわしい花であって、その花が飾られてあることは當りまへのことであるように、重雄とは切離されない花のように思はれる」、「遂に私は声をあげて泣いた。母が出て来て挨拶もできず、『先生』と言ひざまいつまでも顔を上げ得ない」、「私は泣き声をおさめ、その母のせなかをさすりつつ慰めを言ってゐるのであったが、母と共々に胸中はないてゐるのであった」、「私は声をあげておいおい泣いたことは、あやめの時と重雄のときとこれで二回である。重雄はまだ十九かはたちの時から歌をはじめた言はばまな弟子である」、「この子が恋をして『先生切ないよ』と言って私の膝に甘へたことがある。『この子が』といふ気もちがするのである」と、愛弟子の死を切々と書き留めている。

しかし、よしたかの藤井の歌についての評価は、「台湾であぢさゐに発表した彼の作品は、極く彼としての初期に属し、ただあくまで歌のよさを感じさせられる程度の作ばかりであって挙げて論づるに足るものがないので」としている。

藤井は療養中も精進を続ける。6首挙げる、「癒ゆる日のありと思はね夜毎ラヂオに英会話学び一年過ぎぬ」、「おそるおそる寝返るにだに息迫りはかなむ夜半を咳も出で来ぬ」、「脈線熱線の乱れカルテに著るるデッドクロス今は現実に己が身のこと」、「開放窓より迷ひ入りし寒の雀が忽ち附焼となり吾膳にあり」、「俸給停止通知書を届けに来し小使が老父と養鶏の話してゐる」、「窓の桟に玻璃の截口一條黄金に輝きつつ暮の月出づ」（『あぢさゐ』第26巻4月号）。この作品については、寺山まさるの「四月号作品一読後感」があり、「1　癒ゆる日の、平明な作だが結句で生きた。2　おそるおそる、動作が判然としてゐて深酷さをそそる作、3　脈線熱線、上句の構成は知性の流露とも云ふべく着想は悲壮である。4　開放窓より、平明な作だが事象を克明に描写しており」、「5　俸給停止、味のある作、小使らしき所作の表現面白し、6　窓の桟に、充実静寂境黄金にまさる、毎月あぢさゐに拝見される容体にあっての作歌精進敬服の外なし」と評されている（『あぢさゐ』第26巻7月号）。当時の時代相と相俟って「療養短歌」に着目する必要があろう[5]。

一方、藤井の台湾に寄せる思いを門人たちは理解していた。平井三恭は「藤井重雄によす」として、「生命迫る日々に向ひて歌よめる重雄が心の何ぞきびしき」、「悩み果ててつひにここまで到れるか生死こえたる歌よみいでぬ」、「湘南の海鳴り耳にさやるとも心は日々に澄みてゆきしか」、「吾が生命燃ゆるものなき日日のうたあぢさゐよめば君に恥ぢらふ」、「再びに行く日はなけれ台湾を思ふ歌にぞ胸あつくなる」と詠う（『あぢさゐ』第27巻1月号）。

その死後、多くの門人が藤井を偲ぶ。その一人、村田くに子の追憶を紹介したい。村田は藤井の「小包の和布臭へば癒えてまた航くなき海を台湾を恋ふ」をあげ、「この歌を口吟む時、万感交々悲しさばかりが胸に溢れて、とめどもなく涙が溢れるのである。心暖き師の送り賜ひし和布の匂ひに過去の台湾を恋ふ心中を思ふ時、私には終生忘れぬ一作である」と記す。

なお、藤井はこの歌に先立ち5首を詠う。「卑屈なることばとなるにためらひつつ仰臥して退職挨拶状を書く」、「病床に食べて偲べと鳴門市の旅館より和布を送り給ひぬ」、「鹹はゆき磯の臭ひをなつかしむ枕辺に和布の小包拡げて」、「むしりとり和布を唇に喞へ居り想出のなかにあはあはとして」、「五月末日朝の病床に小包の和布臭へり切なきまでに」（『あぢさゐ』第26巻10月号）。

また、群馬県箕輪支部を取りまとめていた狩野みちは、「感銘抄」によしたかの

十月ぶり重雄が死にし家に来て香炷く庭ににほふ残菊（二八、二月）

をあげ、「藤井様の霊をなぐさめる為めに家を尋ねて先生の親心が涙のにじむ様な思ひ、いつか盛りを過ぎた菊に心を寄せ死の厳粛に自らを浄め大きな愛でなぐさめて居られる誠にもさみしき内に浄らかな人間愛の表現です」と、よしたかの師弟愛を称揚する（『あぢさゐ』第29巻10・11月号）。

3. 藤田木蓮の死

よしたかは、「旧い人々」と題して「かつてあぢさゐの四天王と言はれた男に門馬つねすけ、瓜生英彦、藤田木蓮、南城英樹（現平井三恭）の四名であった。これを言ひ出した人は、斎藤東柯といふ俊才俳人であったが、この中の藤田木蓮君が五月二十四日、下関市長府の自宅で急逝した」と書いた（『あぢさゐ』第27巻9月号）。

それに先立ち、よしたかは「藤田木蓮」と題して

顔を見に来てくれしかといふことは上なき君の世辞にぞありけり

よからざる病とぞいふ遂にしてああ然るやと思ひたるのみ

垣外に声追ひかけていふことは再会は期しがたき如くに

と詠った（『あぢさゐ』第27巻1月号）。

木蓮の訃報を伝える『あぢさゐ』（上掲）には、門馬つねすけが「木蓮は創刊号」からの会員であること、「引揚後一首も発表して居らぬ」、「師の亡妻であぢさゐの為に血みどろの闘をした美鳥サンには良き相談相手であった」ことを書き、木蓮の「冬川の水は寂しき光なり県境の山に見下す」を紹介、「木蓮の霊よ安かなれ、そして新しい会員諸君にあぢさゐの為には君は無くてはならぬ存在であったことを知って戴こう」と結んでいる（「藤田木蓮と松久静枝のことども」）。

筆者は、『あけぼの』に掲載された15首を除いて、木蓮の歌に出会ったことがない。『あぢさゐ』の極々初期に発表していたのであろう。よしたかは、「木蓮アメバーを病みて久し」と題して、

瞳孔のいたくだみたるをとろへは安からねども言へずわがをり

忠告と知りつつ唯に聞きおくと憎まれぐちを尚もたたくか

と詠ったことがある（『あぢさゐ』第10巻2月号）。

さて、木蓮の功績とは、歌は勿論のことであるが、みどりの相談相手であったことであろう。生前のみどりの動向、よしたかの台東への転勤、紘一の誕生、鍬田友竹について記述されている一文が、『あぢさゐ』第31巻5月号に掲載されている。

話は遠くさかのぼりますが、私が未だ少女の頃花蓮港の筑紫館と言ふ劇場で母に伴はれて行きました折、よしたか先生がカリエスにて半身不髄の前夫人みどり先生を座布団と一緒に抱きかかえられ一番上席の正面に座せられた、かいま見し御姿は幼い胸に強くやきつけられて、人妻となり子の母となって齢たる今も、その尊さがひしと胸にせまり自己の抱く夫への感情に対し鋭い反省のメスともなっております。

其の後月日流れて、先生の御指導を仰ぐ様になり丁度先生が台日新聞の台東支局長をして居られました頃視察出張で台東へ行き突然お伺い致しました所、折も折紘一さんが出生なされて日も浅いのにかかはらず、心からの先生並に次子先生の歓待を受け帰途にさいしましては同行の私の友人に迄お弁当を頂き、物欲を超越された御温情は、今尚私の胸底深くきざまれて忘れる事の出来ない思出の一つであります。

去る二月二十四日の熊本市での再会（中略）、翌二十五日は主人も、先生の御高名は聞き及んで居りましたし、尚この土地には日支事変で散華なされた先生のかつての愛弟子鍬田友竹様の生家もある事とて、私宅で一泊して頂く事に致しました。（原田とし子「回顧と共に」）

本年度、沈美雪氏の「俳人渡辺美鳥女の句境―『身体』『病』『風土』を手掛かりに―」（『日本語日本文学』第37集、2012年4月）がようやく刊行された。本論文は、「1. はじめに―渡辺美鳥女の生涯と作品」、「2. 病人の身体」、「3. 障害者の身体－病床六尺庭前十歩の風景、3.1　枕辺・窓辺　3.2　庭・菜園」、「4. 美鳥女の風土句－風土の中の身体、4.1　文化の身体　4.2　個の身体に立脚した景観の身体性」、「5. おわりに」からなる。論点としては、①美鳥女が女性作家として、俳句という文学ジャンルを自己表現の手段とした、②美鳥女が一人の日本人台湾移住者として花蓮港を深く愛し、個人の体験に立脚した純真素朴な筆致で台湾の風土を記録したこと、③脊髄カリエスという病にかかる身でありながら、美鳥女はその閉鎖的な状況を打開すべく、俳句で自己の生を記録したこ

とにある。俟たれた論考であった。

4. 群馬県箕輪支部

群馬県箕輪支部について、よしたかは「第二十六巻展望」において「団体的には、箕輪支部が竹腰きを、狩野みち等十名ほどが参加した。質的な優秀者の粒ぞろひなので、この支部の飛躍は期して待つべきものがある」と述べている（『あぢさゐ』第27巻1月号）。

この箕輪町とは榛名山麓に位置し、車郷（くるまさと）町と合併して箕郷町となり（1955年）、後に高崎市へ編入された（2006年）。

そして、よしたかは箕輪の会員の面々を語る（『あぢさゐ』第27巻2月号）。まず「下田徳太郎先生」と題して、

先生のかたへに坐り温顔の白きくちひげ見つつ講義す
五十年子弟導きこの里のよき象徴とさびいますかも
八十のみよはひ越えて今更に歌はげむと宜（の）るがかしこさ

と詠う。この下田徳太郎は箕輪城の研究者として著名であった[6] 同城は武田信玄の上州攻略を一時阻止した名城として知られ、新田次郎『武田信玄』〈火の巻〉にも「榛名（はるな）山おろし」、「付け入れられて落城」に詳細に描かれている。

続いて、「竹腰きを夫人」と題して、

わづらひに捆はるまじもこののちの生涯歌にゆだね給へや
みづからの命を愛しみこの道のとはの光りを追ひ給ふべし

「青柳久子女」と題して、

感動にすぐ涙ぐむひたぶるの激情こそは歌に生きなむ
塩原の歌がよきゆゑ全作を朗詠してよとふことの直さよ

「狩野みち女」と題して、

今はただ超越の境恋ふのみとよく戦ひて来たまひにけむ
上州女の特長君に見るごとし何かたのもし姐御さびして

とある。

この狩野みちの息子・守の夫人が狩野ヒデなのである。前稿に記した通り、よしたかの遺族も所有していなかった『あぢさゐ』第26巻2月号を、筆者に提供されたのである。

また、ヒデは傘寿を記念して『命ひとすじ』（私家版、2011年）を著し、来し方を偲んでいる【図版2】。それに拠ると、ヒデは日本赤十字社看護婦養成所を卒業し野比海軍病院に召集され、やがて

【図版2】

国立習志野病院に移り、引き揚げの病院船にも勤務した[7]。1948年（昭和23）に神奈川県の検定試験に合格、「産婆」の免許をも取得したのであった。その後、分娩の勉強をするために、縁あって狩野みちの見習いとなり、やがてみちから「ヒデちゃん、守と一緒になってほしい」と懇請され結婚したのであった。

『命ひとすじ』に「主人進学」という一節がある。「昭和二十九年、勤務していた小学校を退職し、東京教育大学に編入した主人は自宅から通学した。働きたいと思っていた私は叔父が経営していた榛名荘病院に就職した。四歳の長女は義父母にお世話になった。母親として子供と離れるのは辛く義母が近所に遊びにつれていった留守に家を出た。土日には帰ると他人をみるように側に寄りつかない娘も月曜日の朝は泣き分かれ、『ごめんね』とわびながらの出勤。二年間のガマンと心を鬼にした」、「榛名山麓の自然に恵まれた緑多い環境の病院は、室田町中室田（現在の高崎市）にあった。キリスト教の病院で、神父様がいて教会もあった。各病棟婦長には修女さんが多かった。修練女さんもいて全員看護婦資格のある人だった、戒律は厳しいと想像していたが、朗らかで優しい人ばかり、信仰のない私と同じに思えた。自動車はなく、自転車では遠く通勤は無理なので宿舎に入った。高崎市街の夜景が切ない中、毎日届く主人からの絵ハガキに救われた」（47-48頁）。

このエッセイに示されていることを、ヒデは『あぢさゐ』に投稿していたのであった。「合格に頬輝かし帰り来し夫を囲みてはづむひととき（教育大学）」（第29巻5月号）、「子を想い一人歩める山荘に淡き三日月今沈みゆく」、「おとなしく第一夜を寝しといふ便りにも又涙せし吾」（第29巻7月号）、「子を想ふ切なき想ひ忘れなんつつじ花咲く山は清き」、「明日逢へる夫子想ひて宿直（とのゐ）する甘き香おりのすずらんの花」（第29巻8月号）、「高崎の灯を見つめつつ歌詠めぬ寂しさに倚る処置室の窓」、「徹夜して絵の製作に励みゐる夫と別れの雨は物憂し」（第29巻9月号）、「うつむきて見送る吾子にもの言へず去り難き朝の陽光まばゆし」、「夕霧にこもらふ病舎の中にゐてアンヂェラスに祈りする修女（きみ）」（第29巻10・11月号）――。

ヒデの歌に呼応するように、みちも「つれ添えば夫の学費をかせがむとけなげなるかな勤めする嫁」と詠う（第29巻8月号）。その内助の功により、夫・守は群馬大学に奉職（1956年）、二科賞受賞（1964年）、二科会会員推挙（1966年）、やがて二科会常務理事となり運営の中枢に加わった（2004年逝去）。

5. 白木蓮を詠う

よしたかは、「寂念」と題して白木蓮を10首詠う（『あぢさゐ』第29巻5月号）。

ほの蒼む月のひかりにうち沈み今こそ白し木蓮の花

幽明の月に万象（ものみな）消え失せて白き幻の木蓮の花

月かげに濡れておぼめく笹むらの暗みのゆゑに白き木蓮

未だわがいのちのなかに消えである面影ひとつ木蓮のはな

思ひいづる名もはるかなり月かげに魂魄（こんぱく）白し木蓮のはな

われのみの魂にひそとささやきぬ白き木蓮月にぬれつつ

罪も悔いもまざまざとして抱きつつ目の前に白し木蓮の花

花をめぐり思ひはひとり彷徨ふやまさしくそこに木蓮の花

よもすがら月に曝され浄められ木蓮の花光（て）り映（にほ）ふなり

月沁みて木蓮の白極まれば空々寂々（くうくうじゃくじゃく）ただ月

と花

筆者たち読者は、このよしたかの一連の歌から何を連想するか。よしたかは、『あぢさゐ』第23年6月号において、「春愁」と題した18首を載せたのであった（本編（下）－1参照）。ここに煩を厭わず再掲する。

おもひでは悠に朧夜のほの青白き木蓮の花
かぎろひのほのかにうかむおもかげも夢うつつなる木蓮の花
いのちなげうちつらぬかむと必死さへあなあなあはれあはれすぎにし
日ぶみ夜ぶみ書きつつづけたる情炎もあなあなあはれあはれすぎにし
あけぼのの藤むらさきに朝月の消えぎえにしてにほふまみはも
断崖のま下は南支那海のまぎらはしさに唇ふりにけり
すずやかにはずめる声よ手をとりて断崖の上を跳びかけるなり
花あふちにほひよどめる台南の紺青の夜の濃きおもひかな
花あふちにほふおそ春台湾の旧都台南に残るおもひや
ひとよさをふすまへだてし怨めしの思ひをこむる熱きくちづけ
抱かれしさまがピアノに映るゆへやさしとて尚顔をうづめつ
何がなしやさしく仕へたけれどもするすべなしといふかごとはや
君がためするうれしさとはんかちを湯どのにすすぐ旅のやどりに
若き詩人と高官夫人の恋などと書き立てられし罪もはるけし
ふれゐつつ身もだえて泣く相へだつ肉体越えむなげきなりけり
泣く泣くに許してよとてこばみゐしすべてはここになげいだされつ
身をしのび質屋がよひも敢てしていかに切なき逢瀬なりけむ
むらさきのささなぎの花あえかにも高貴にあでにしぼみけらずや

よしたかは、本号の「後記」に「春愁一連の作は亡き岩満千恵との恋愛事件である。生きあえぐ現相の中にこうした抒情も時にとって清涼剤であらう」とし、『最高の価値と最大の幸福』（あぢさゐ社、1949年）においては、その顛末を「雑誌の援助者である某子爵の息女であり、高官夫人であった千恵という女性と恋愛をした。これは明らかにはげしい熱烈な恋愛であったが、ついに逃走を企てて僕のある友人への告白から、追手がかかって彼女は監禁されツイニカンキンサルカナシチエの一本の電報と共に永遠の別離となり、それから約十年彼女は夫の許に帰り、大連で病死したといふことを改造社版新万葉集の作者経歴によってはじめて僕は知ったのであった」（112頁）と書き記している。

筆者は、よしたかと別れた後の千恵の半生を、千恵の歌の発掘により明らかにした（本編（中）－1参照）。よしたかは、その3年後にも土佐路を歩きつつ、

花あふち暖国土佐ににほふ時岩満千恵をまた思ふなり

と詠う（『あぢさゐ』第26巻7月号）。よしたかは、かくも千恵を愛していたのか、という感慨をもつ。

6. 宗教雑誌『聖愛』の発行

よしたかは、1954年（昭和29）11月号の創刊を期して、「創造の宗教」と銘うった月刊雑誌『聖愛』を準備し、刊行した【図版3】。その趣意書には、「宇宙存在の意義は創造の一途である。人生は創造である。創造なくして神の存在さへもない。神の存

【図版3】

在の意義は創造である。そこからのみ宗教も芸術も道徳も生れる。新しい明日の宗教は自我創造の宗教でなければならない。かかる原理と使命によって今後の人間の拠るべき灯明台としての『聖愛』はその期待に副はむとするものである」とある（『あぢさゐ』第29巻10・11月号、裏表紙）。

まず、巻頭には「自由創造の宗教」と題して、下記の文章が掲載されている。

> 私は何に由って生きるのであるか、私は私の自由によって生きるのである。私自らの生命の原理によって生きるのである。私もあなたも、キリストによって釈迦に生きるのではない。あなたの中に、「かく生きて行け」といふ導きがあるのである。あなたの中に在る神の声なのである。深くみづからの中にあるその導きの声を聞かねばならないのである。神はあなたの心霊と共に常に永遠に在るのである。神はわれわれを善き方向に生かしてゆく原理として在るのである。生きるといふことは、この善き方向に自らを創りあげてゆく、自我を創造してゆくことである。このことの外には人間の生くべき道は何ひとつない。また生きる歓びも幸福もこの外にはないのである。あなたは神によって生かされ、神の存在する意味はあなたがあなたの自由によってはじめられて創られてゆく。そこに今日生きてゆく唯一の道があるのである。

次に、織戸栄三郎、夏目百合子、岡謙吉、竹腰きを、狩野みちの5名の歌があげられている。その後、本文として、よしたかは「創造の宗教」と題して、「18　信仰」、「19　善美」、「19（ママ）　今!!この一日」、「20　無限無窮」、「21　人間」、「22　ささやかな愛の花」、「23　どんな生きかたがしたいか」、「24　大生命」、「25　高貴な心」の9項目について（1～20頁）、「聖き愛の運動として」としてその趣旨を（21頁）、「聖愛実践運動三則」（22頁）を記している。

しかし、『あぢさゐ』12月号、「後記」において、「『聖愛』は追加申込者もあり、双手歓迎される向きもある反面宗教と銘うつことがこのもしくないといふ向きもあり、私自ら機未だ熟せずと信じ続刊当分見合せにしました。待望の人々に深くお詫びしますが不日形式を改めて出すことにいたしますので御諒承願ます」とあっけなく撤回するのであった。

ただ、内田紀満はよしたかの歌を評して、「私たちは彼がすばらしく腕のいい職人であることに驚く。生方たつゑなどとはやや質が異って古く、モダニズムというより新興宗教的な色合いが濃い」と、褒めつつも批判している（「戦後歌壇の形成」165頁）。筆者は「宗教的」という言葉は安易に使うものではないと考えている。何故ならば、「宗教」という語句は手垢にまみれ、本来の意義を見難く

している[8]。従って、「新興宗教的」と一括りにして断じてはならない。

7.『あぢさゐ』創刊 30 周年前後

1955年（昭和30）、よしたかは『あぢさゐ』第30巻1月号、「年頭言」において「三十巻を迎へて、一応あぢさゐは外がわのかたちをと整へたのである。これからこそ真個の仕ごとをしてゆかねばならない。それは何か、即ち各自が個々の完成をいよいよ、じっくり慎重にかつ真剣になしとげて行かねばならぬことを改めて決意すべきである」、「もうひとつは、自我の完成と言っても、個人である私は、いつでもその他の個人である。すべての人と共に限りなき関はりの中に於て、社会の中にそれと共に完成してゆくのである」と決意を新たにする。また、「あぢさゐ創刊三十年迎ふ」として9首を寄せている。

あぢさゐの黎明ぞかしみづからの炳熱に燃え陽はのぼるなり
おのれ深く慎み恃みおほどけく遼遠のみちに今立たむぞよ
多難なる至上の道も確信の上に勇躍行きつくすべし
犠牲覚悟を妻が先んじ言ふもよしわれに百万の味方ぞよこれ
ふらふらに疲れ果てても闘志燃ゆ三恭見ては起たざらめやも
殪れて熄まむ不屈の意気の三恭に愧ぢて奮ひて従きゆかむのみ
一命をかけし三恭にはぐくまれしあまたの人よ泪ぐましも
い行くべき道と決意し確信となりて金剛不退転の意志
みづからに苛酷一義の責は負ひ創造理念実証の道

9月号においては、巻頭言「永遠の黎明」をあげ、「われわれの前には、日に日に新しい永遠の黎明がある。ただ、不変の鉄則としての作歌は、自我創造の道に徹してゆくばかりである」、「作歌することの意義は、人間としての本質その内容を充実せしめ、完成し創造してゆくことである」、「人生荒寥の曠野のどこに花が咲くか、あぢさゐは、善き生きを求める人々の心につながる花の中心であり、この花さく園を無限に拡大せしめなければならない。その花は、永遠の黎明の聖き愛の大気の中に咲くであらう」と述べる。ここに「聖き愛」、すなわち「聖愛」という言葉が出てくる。

「回顧三十年」では、1926年（大正15）によしたかが台北から花蓮港に赴いたことから筆を起こし、その締め括りを「真個の仕事はこれからである。われわれの前には永遠の黎明が待っている」とするのである。ここに「永遠の黎明」という言葉も繰り返されている。

11月号は「創刊三十周年記念大会特集号」であり、記念写真とともに「創刊三十周年記念関西大会記」、「あぢさゐ創刊三十周年祝賀全国大会記」が詳述されている。

ところが、12月号において台湾以来の同志の平井三恭が忽然と姿を消すのである。一体、何がおこったのであろうか。

おわりに

本稿は『あぢさゐ』第27巻から30巻を対象に、大きく7つの視点から論じてきた。ここで重要な問題は、7の平井三恭の消息であろう。

次子は「十二月二十七日あと四日で新年を迎えます。昭和三十年は良きにつけ悪しきにつけ忘れ得ぬ年となりました」と記し（『あぢさゐ』第31巻1月号）、よしたかは「時雨山房雑記」に、「或る事件があった、私は一切の抗議をしない。善悪正邪

は何ものよりも最明瞭にその人自身の中に語られてゐる。唯時がそれを明らかにすることを知っているのみである」と語るのみである（『あぢさゐ』第31巻2月号）。

『あぢさゐ』における三恭の存在の大きさを認識するにつけ、その解明は最重要課題である。

註

(1) 大井恵夫、内田紀満『群馬の昭和の歌人』（みやま文庫、2000年）に、「戦後歌壇の形成」の章があり、「群馬県歌人クラブの結成」の項がある。そこには「県内歌人の横の連絡親睦団体として群馬県歌人クラブが結成された一九五一年（昭26）」として書き起こされている。内田は、その当時の状況として「政治面だけでなく、文化全体の右傾化」を指摘し、「例えば群馬県歌人クラブが創立されてこの年に発行された年刊歌集編集後記の冒頭には次のような文が出ている」として、「戦争によって重圧されてゐた歌壇も終戦後反動的に人間の想像力の無限性と自然の合目的性とに対する確信を取り戻し、本県でも各所の結社や集団の交流が始まり、再び県単位の歌人集団結成の機運が醸成されて本年一月三十一日高崎市立図書館に於て新しい機構による群馬県歌人クラブが誕生した」を引用、内田は「この文は戦中における群馬県歌人協会の戦争責任についてほほかぶりをし、知らんふりをして通りすぎようようとする態度である。協会がクラブと看板を塗りかえれば、もう戦争責任は御破算となり『人間の創造力の無限性と自然の合目的性とに対する確信を取り戻し』たと平然と言い切れるのであろうか」と舌鋒鋭く迫る（176-177頁）。

(2) 上掲『群馬の昭和の歌人』に「昭和歌壇の形成」の章が立てられ、「吉田緑泉」の項がある（28-32頁）。大井は「阿部鳩雨創刊の『草炎』を引き継いだ吉田緑泉」、「昭和二十六年、群馬県歌人クラブが結成され、歌人協会の事業を継承することとなり、緑泉は常任委員となる」と記す。吉田については、『群馬文学全集』第12巻「群馬の歌人」（群馬県立土屋文明記念文学館、2002年）にも取り上げられている。

(3) 甘楽歌人クラブについて、上掲「昭和歌壇の形成」には「早水草之助」の項があり1949年（昭和24）に結成、その会長就任が記されている（77頁）。

(4) 下村湖人の唯一の歌集『冬青葉』（新政社、1933年）には、親友の高田保馬が「序」を寄せ、そこには「日本の歌壇に於ける各流派の専制的排他的態度」という文言がある。

(5) 上掲『群馬の昭和の歌人』、「昭和歌壇の形成」には、「『あぢさゐ』の理想主義」という項もある（162-168頁）。そこに「一般会員の作品」として群馬県在住会員の作が取り上げられ、内田は「病的で不健康なものが多い」、「病者独特の孤独性と感傷性が反映されている。こういう傾向は、現実の諸矛盾から目をそらせ、運命論的な自虐の世界に逃避させる麻薬のような働きをもち、健康な前向きな思考とはいえないのである」と断じている。果たして、そうなのであろうか。当時、国民病と称された肺結核について、内田は松田道雄の名著『結核』を紐解き、松田の自由と人権を何よりも尊ぶ思想を学ぶ必要があろう。その際、大森隆子「松田道雄の育児思想（Ⅰ）―小児科学から育児学へ―」（『豊橋創造大学短期大学部研究紀要』第17号、2000年）は参考に値する論考である。

(6) 下田徳太郎（1875-1963／明治8～昭和38）について、『箕輪町誌』（箕輪町教育委員会、1975年）には、「昭和二十年三月引退にならるまで実に五十有六年間、箕輪小学校に教鞭をとられ、教え子数千人、その薫陶を受けたもの、親子孫の三代に及びこい慕われつつ本町教育のために尽すいなされた」、「和歌俳句を嗜み宮中歌会始めには毎歳、詠進されて居られた。また史蹟箕輪城に関しての研究も深く、その資料も多数収録されている。その代表作『箕輪城物語』が昭和四十一年箕郷町俸給生活者団体により刊行された」とある（704頁）。下田については、『群馬県教育史』別巻〈人物編〉（群馬県教育委員会、1981年、227頁）にも記されている。

(7) 筆者の父・野口泰照は、復員病院船勤務を経験し、その記録を残しているので、ここに転載しておきたい。

敗戦後、外地各地に居る軍人軍属及び邦人の引揚業務は重要且つ緊急な課題だったので、進駐軍の厳重な管理下に行われた。

戦後の東南アジアの衛生状態は極めて不良であった――終戦直後の内地の環境の劣悪さを想起

されれば推測し得ると思う。斯(かか)る状況下で、戦傷、戦病（殊に伝染病、栄養失調及び精神障害等）の悪化や多発で復員者及び引揚者の内地送還は急を要し、戦争により多数の船舶を喪失して居たので、至難な事であった。

進駐軍は米国のリバティ型貨物船（7 隻）及び LST 型上陸用舟艇（多数隻）を貸与して、日本政府（厚生省）に命じて引揚業務を督促した。リバティ型貨物船は各船倉を蚕棚状に艤装して患者収容用の病床にし、医師及び看護婦を乗船させて就航した（この第一号が VHOOI〈アルニタ号〉で、船腹にこの記号が大書された）。復員病院船の誕生である。私は此の船に乗船を命ぜられた。他の乗組救護員は関東地区の国立病院より医師、薬剤師（計 10 名）が派遣され、看護婦は当時国立病院に勤務して居た日赤救護班及び国立病院看護班（計 5 班、120 名）国立国府台病院に集合し、編成された。混成集団だったが、全員よく理解し助け合い、医長を中心によく纏って行動した。

病院船は SCAJAP（スカジャップ）と称する進駐軍の船舶統制機関の命令により、昭和 21 年 2 月より 11 月まで厳重に指示通り運航させられた。私の乗った病院船の航路の概要は、横浜港を出航して仏印ハイフォン港へ行く。患者を収容して浦賀港へ。患者を下船させて中国上海港へ。収容して浦賀港へ。下船させて中国の胡芦(コロ)島へ。収容して佐世保港へ。下船させて再び胡芦島へ。収容して佐世保港へと繰返し航海をした。

此の間、狭隘なる船内、絶えざる機関の騒音、高温多湿な環境、世相は虚脱状況下であり、台風圏内にての悪気象下の海上は風雨と共に船舶の動揺烈しく、地上勤務と異なり船酔者も多発して、患者の疲労困憊もその度を増して症状悪化し、航海中に死亡された方も多数あった。

これ等の屍体は懇(ねんご)ろに水葬された。船長、医長、担当医、担当救護班婦長等の立会の下で厳粛に行われた。船は粛々と屍体を中心に旋回して汽笛を吹奏した――実に物悲しく響き渡った。

病院船は目的地の内地港湾に到着しても、検疫錨地にて待機させられて直には下船は出来ず、コレラの猖獗を極めた時は待機期間が延長され、この間に逝(な)くなられた方も多数だった。浦賀水道に何隻もの多数の船舶が待機させられ、時化(しけ)の中の各船の情景は悲惨であった。船の乗組員でさえも毎回外洋航海を終えて内地の燈火を見れば、毎回思いを新たにすると聞く。帰還者にしてみれば「内地に着けば直に上陸させて貰える」と思っていたに違いない。況(ま)して海面に揺れる収容施設の燈火を目前に眺めての無念さは如何ばかりであったろうか。「一刻も早く内地の土を踏みたい」と遠い外地からずっと思い続けて来た望郷の念も果せずに逝くなられた方の無情さを感じられる。
（野口泰照「戦争と生死の峡(はざま)」『文化・集団』第 3 号、あさを社、1990 年）

また、父は国立高崎病院において、長らく結核患者の方々の治療に当たっていた（昭和 29 年まで）。筆者の祖父の逝去後、父は街中に開業したが、そこに国立病院時代の患者さんが通院されてきたことを、筆者もまた記憶している。そのなかには『あぢさゐ』の会員の方もいたのではないだろうか。父に歌会の様子を聞けなかったことは遺憾である（平成 17 年 6 月 17 日逝去）。

(8) 例えば、『月刊　くだかけ』2012 年 11 月号（NPO 法人　くだかけ会）には「宗教って何でしょう」という項目がある（18-19 頁）。

On the *Tanka* Poetry of Yoshitaka Watanabe after World War II (1952~1955)

Tanka Poet Yoshitaka Watanabe : His life and literary works (Part 5)

Shuichi NOGUCHI

【key words】

Taiwan, WATANABE Yoshitaka, *Ajisai*（hydrangeas）